

第一章 手賀沼湖畔



三樹荘

案内図 (1) “はけの道” 下方;アビスタ発着 ; 6km



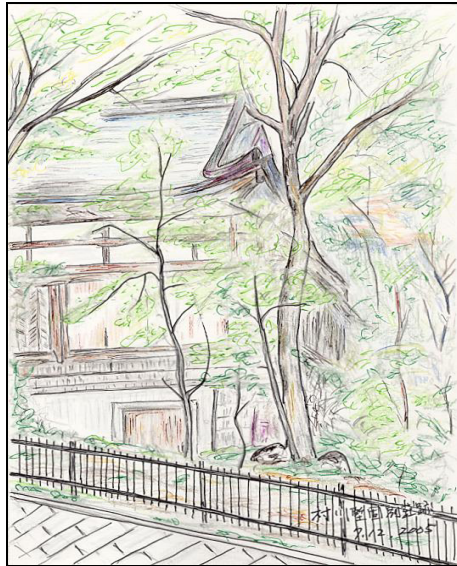
景観スケッチ 6題



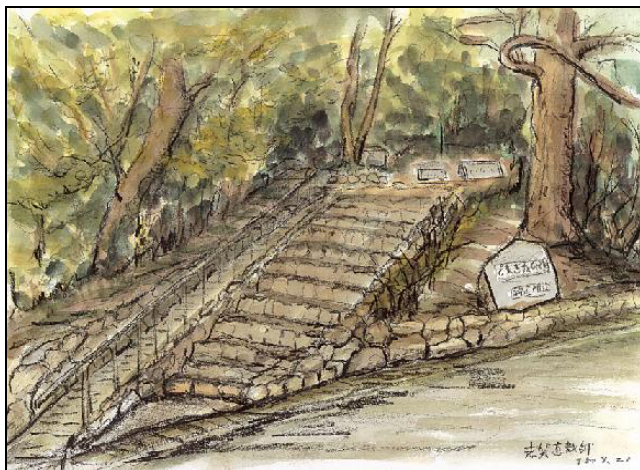
白鳥をデザインした手賀大橋 高野瀬恒吉絵



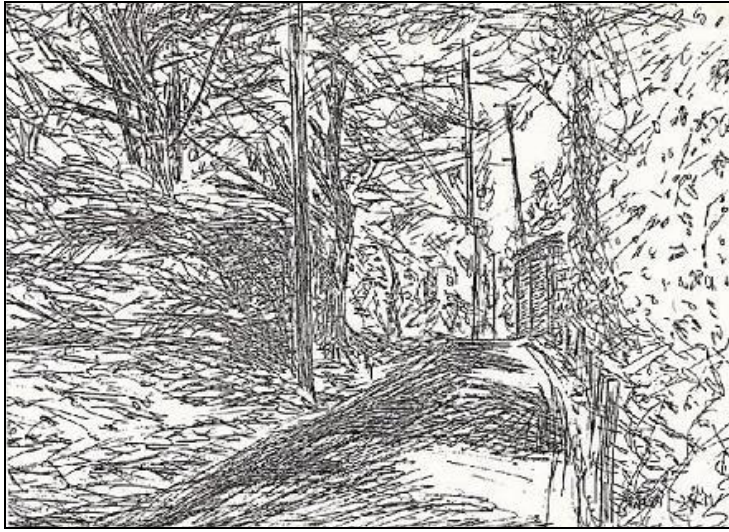
手賀沼の初日の出



旧村川別荘新館の朝鮮風建物



志賀直哉邸跡入口 高野瀬 恒吉絵



楚人冠坂



緑 香取神社

案内図 (2) “はけの道”上方 ;我孫子駅南口発・着 5.5km



景観スケッチ 7題



白山古墳群東端白山坂からの手賀沼



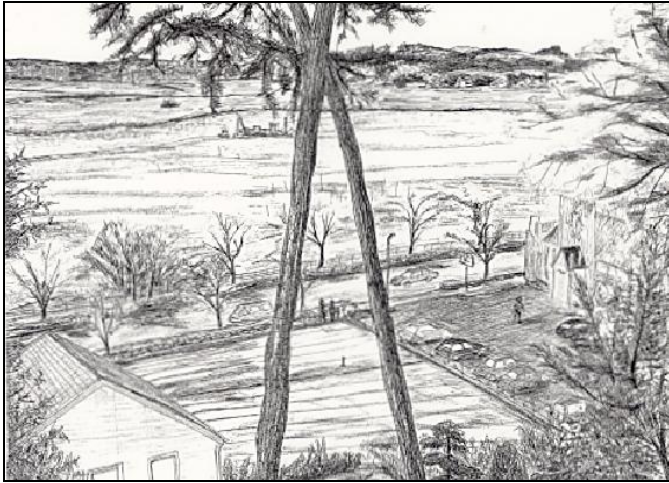
嘉納農園で近代農業を行った松本家



神戸邸の白壁塀



“はけの道”の湧水井戸 高野瀬 恒吉絵



白山古墳群の坂から手賀沼



船戸の森 木陰の東屋



元根戸新田名主邸跡(平成19年まで存続)

第一節 歴史景観

(1) 古代の手賀沼湖畔

現在の手賀沼側丘陵には、その延長4キロメートルの間に四世紀末東葛地方最大の水神山古墳を始めとする香取神社古墳群、高野山古墳群、並塚古墳群、子の神古墳群、白山古墳群、根戸・船戸古墳群が分布し、その数は合計58基余りに及んでいます。いかに古代の手賀沼湖畔に多くの人々が手賀沼にかかわって生活していたかを物語るものです。その出土品は根戸の金塚古墳の鉄製の短甲は別として、水神山古墳の武器を持たない女性首長以後は、武器に属する直刀、鉄鏃、鉄鏃など、それぞれの古墳時代で権力と共に引継がれていたものと見ることが出来ます。集落遺跡からは、沼での狩猟、漁労の用具、装身具、生活用土製品が多く出土することから、手賀沼は生活そのものであったことが理解出来ます。首長の古墳は、台地の各地から手賀沼を眺望し見守っていたのです。

金塚古墳の石枕は、遺体の頭部に当てるもので、霞ヶ浦から利根下流域に分布する「常総型」石枕ですが、近年柏市の弁天古墳からも出土しました。この二つの古墳の発見は手賀沼と利根川水系の支配者が船によつて密接に交流していたことを示すものと考えられています。

古墳時代後半になると、寿、白山にも古墳を残しながら政治的中心は徐々に湖北地域に移り始めました。

(2) 近代の手賀沼湖畔

我孫子の地は、永い文化・歴史景観が停滞していましたが、明治二十九年の常磐線開通で、大正に入ると、手賀沼湖畔は東京文化人の別荘地として注目

されるようになり、多くの著名・文化人が訪れました。嘉納治五郎は明治四十三年、我孫子の地を訪れ、手賀沼にテムズ河畔を連想して安住し、天神山に別荘を構え、甥の柳宗悦やなぎむねよしを呼びました。柳は志賀直哉、武者小路実篤、瀧井孝作を呼び寄せました。また柳は、日本陶芸株の顧問・陶芸家六代目尾形乾山を招き、大正五年には、バーナード・リーチを招きました。その後昭和十三年には河村蜻山かわむらせいざんがそこに深草窯を持ちました。

大正末から昭和始にかけて「我孫子の風景」、「崖」など、我孫子に題材を求めた三岸好太郎(1903〜86)のほか美術院の児玉素行、洋画家梅原竜三郎、原田聚文、著者の知る東北画壇の故菅野廉など多くの画家達が訪ねました。生誕120年バーナード・リーチ展の展示文章では「我孫子コロニー」が形成されたと表現しています。

西洋歴史学の村川堅固は、別荘の中に「朝鮮風」建築の書齋を造りました。杉村楚人冠は、手賀沼を愛し我孫子の地に移り住み、新聞人として手賀沼を幅広く世間に紹介し、また我孫子ゴルフ倶楽部の創設に尽力しました。

その一方、利根川は氾濫を繰り返し、手賀沼に逆流する水で沿岸の開拓農民たちは苦しみました。そのため洪水防止と食糧増産を目指す手賀沼干拓が検討されました。昭和初期に漸く手賀沼干拓が計画されると、杉村楚人冠、嘉納治五郎、村川堅固たちは環境保全を訴え「手賀沼保勝会」を結成し対抗しました。彼等が愛した手賀沼は、四季折々の水面模様、晴れた日の富士の風景、特に夕暮れ時の時々刻々と輝き変る富士の姿と、何時も変らぬ感動を人々に等しくみせてくれています。

(3) “はけの道”

“はけの道” 沿の崖は、どうして出来たのでしょうか。

序文で触れたように関東平野六万年前の海面降下は大変急激でありました。そのために関東平野の水系の侵食は著しく、急に掘り込まれた凹地谷をつくりました。それは一見海触崖のように見える程です。そのあとに沖積平野が出来て現在の“はけの道”が出来たのです。また手賀沼は、江戸時代から盛んになった干拓地の埋め立てに使う土砂を、沼沿いの山地を削って作りました。崖に露出する帯水層からは、湧水が路に流れ、“はけの道”と呼ばれるようになりました。

今でも雨季ともなると所々で湧水が見られ小路一面が水浸しになることがあります。下方は日立総合経営研修所の斜面下から子の神大黒天下と志賀直哉邸跡公園で、上方は白山下から旧武者小路実篤邸下の区間各所で、“はけの道”を実感する事が出来ます。

(4) 「美しい日本の歩きたくなるみち500選」

これは、日本ウォーキング協会が国土交通省他の後援のもと、現地踏査の上歩行適正(安全性、快適性、案内性、魅力)などを基準に選定し、平成十七年一月に発表した“歩きたくなる”ウォーキングコースです。千葉県では、10コースが選ばれトップに「手賀沼と我孫子の歴史を訪ねるみち」(手賀沼湖畔 “はけの道” 下方)が選ばれました。他の九箇所は、正式名称省略しますが (1) 千葉：水回廊、(2) 千倉：花畑と潮風王国、(3) 佐倉の町、香取神宮、(4) 谷津干潟；習志野市；千葉市、(5) 市川；歴史と文学、(6) 富山町；「とみさん」ふるさと、(7) 印西市；白井市；北総の自然、(8) 流山；柏市；利根運河と

柏の葉、(9) 白子町；九十九里浜と南白亀川などです。

第二節 名所解説

(1) “はけの道” 下方

① 手賀沼公園

手賀沼公園は、四季折々の花々と沼の景観が一年を通じて美しい。ひととき高く風に揺らぐポプラ並木(平成九年度我孫子市景観賞)は大変印象深く心に残っています。しかし根元が老衰し、倒壊の恐れが生じたため平成十六年の夏に伐採されました。そしてポプラを送る歌「ポプラ」も生まれました。きつこの歌とともにポプラ並木は、心象風景として生き続けるでしょう。代りにスギ科の樹木メタセコイアが植えられました。メタセコイアは白亜紀以降世界的に繁茂し、日本では第四紀初期に消滅しました。六十年前三木茂が化石に命名し、その後で原生種にも類似のものが中国四川省で発見されたことから、「生ける化石植物」と呼ばれるようになりました。

(バーナード・リーチ碑 付図・1参照)

日本で教師を勤めた祖父のもとで京都・彦根で育ちました。後ロンドン美術学校で高村光太郎に出会い、小泉八雲文学を知り、明治四十二年(1911)来日しました。柳宗悦の紹介で六代目尾形乾山の門下となり、楽焼の研究に没頭しました。大正五(1916)六代目尾形乾山の本窯を譲り受け、柳宗悦の我孫子別荘内に窯を築きましたが、同八年に仕事場を火事で焼失したことで我孫子での生活を切り上げるようになりました。

彼の作品は、我孫子で親しまれている“手賀沼我孫子”(1918)と“山と人巡

札(1953)を描いた^{せつき}「拓器鉄砂抜巡礼者模様皿」1960*1の他、「白樺」や志賀直哉の小説「夜の光」などの表紙に使われました。碑にはその「巡礼者」が刻まれ、「東洋と西洋の融合」という彼の「美学」が感じ取れます。

〈血脇守之助碑〉

我孫子宿旅籠「かど屋」加藤家に生まれる。高山歯科医学院に学びました。のち同学院の経営を引継ぎ、「東京歯科大学」に発展させました。野口英世を物心両面から支えた事は有名です。

② 手賀沼遊歩道 (景観スケッチ参照)

③ 手賀大橋 (景観スケッチ参照)

それまで渡し舟が主役であった時代から橋の時代に大きく変わったのは、旧手賀大橋が昭和三十八年に開通したことでした。この橋は市川市で使用後の古資材転用のため、橋の長さには資材が不足し、両岸を埋め立てて付設されました。新大橋は平成九年八月に竣工しました。橋脚と照明灯は白鳥をイメージしたデザインになっています。橋脚は水の流れを良くするように工夫され、水質浄化に役立っています。橋の上からの眺望は素晴らしく、元旦には多くの市民が「来光を拝みに訪れます。

秋谷半七氏*2は、『ここ(大橋)から見る日の出は湖心からながめる日の出といつてよい。ほのぼの白みかけた東の空に赤みがさすとやがて太陽が昇ってくる。朝靄をつらぬいて金色の光が輻のように天空に走って蕭々と太陽が昇る。まさに荘厳そのものである。大自然の息吹を全身に浴び震えるような感動をおぼえる。……』と表現しています。

④ 親水広場・水の館

親水広場・水の館は、平成三年六月オープンした県営の公園施設です。水質浄化の理解を深め、環境保全のための催しを行っています。展望台のドーム、全体が丸みのある水の館の建物は、屋根部を淡い緑色で覆っています。展望台から手賀沼風景はすばらしいものがあります。

〈手賀沼のバードウォッチング×手賀沼バードウォッチングガイド(*3)抜粋〉

手賀沼周辺をバードウォッチングすると30〜40種類、一年を通じて100種を超える鳥を見ることが出来ます。

水田から湖水にかけて見られる主な鳥は、ムナグロ、コサギ、ヒバリ、カルガモ、バン、オオヨシキリ、ヨシゴイ、オオバン、カワウ、コアジサシ、カイツブリなどです。

冬の斜面林には、オオタカやノスリなどの猛禽を見ることが出来ます。ほかにキジ、コゲラ、ヒヨドリ、メジロ、ウグイス、ムクドリ、カワラヒラなどもいます。

春は、葦原が青くなり始める頃、カイツブリやオオバンの繁殖シーズンを迎え、田植への終わった頃にムナグロやキョウジョシギの群れが見えます。

夏は、オオヨシキリ、ヨシゴイが葦原の上を往来します。白いコアザサシ、雛を連れたオオバンやカイツブリが葦原から姿をのぞかせ、水田でアマサギやチュウサギが歩き回ります。

秋の始めは、鳥の姿が最も少ない季節です。北海道で繁殖したシロウドウツバメやツンドラ地帯で繁殖したムナグロなど、またキビタキ、オオルリなど、山地で繁殖した鳥が渡りの途中に姿を現します。普段見かけぬ鳥に出会えるのがこの季節です。

冬は、カルガモ、オオガモ、コガモ、オカヨシガモ、マガモ、ミユアイサガビが湖面

に、オオジュリン、タゲリ、ヒバリ、タヒバリ、ツグミのほか、コミミズクやチュウヒなどもしばしば葦原や水田に姿を見せます。

⑤ 水神山古墳（表紙絵参照）

東葛飾地方最大規模の古墳です。高野山の斜面林の上、手賀沼を望む香取神社の敷地にあります。四世紀末〜五世紀初頭の大変格式高いもので、畿内の前方後円墳に繋がる造り方です。その後の金塚古墳の小さな円墳に比べ大規模で副葬品に武器が無いことから、水神山の首長は、大和政権と直接、間接に一定の政治的関係を結んでいたと考えられます。一方、当時の地方首長の古墳に埋葬される、大和政権から分与された鏡や碧石の宝器がないことを考えると、

おそらく先進地域の上海^{かみつながみ}上国・姉ヶ崎（現市原）の大首長を仲介した間接的な関係であったとも考えられています。

⑥ 香取神社

我孫子の香取神社創立の時代は不詳ですが、香取市の香取神宮は、五世紀末〜六世紀初頭に物部小事が大軍を率いて大和から来て定住し、その後香取神社を祀ったとされています。延喜式(927)における神宮の称号は、伊勢神宮を除けば藤原氏の氏神、香取神宮と鹿島神宮に限られています。日本書紀に「その神、今東国の楯取の地にあり」とあり、カトリは舟の楯取りの意です。また万葉集には「大船の香取の海」と歌った歌のあることから地名と考えることも出来ます。香取神宮の古文書の中には、「海夫注文」と称して沿岸の諸村から輸送金を徴収していたことが読めます。その創祀は古墳時代と推定されます。

高野山香取神社鎮守の森と斜面林は、樹齢数百年もする樹林が多く、銀杏、樺ケヤキ、松、樅、杉など20本が市指定の保全樹木です。

⑦ 鳥の博物館と山階鳥類研究所^{やましな}

鳥の博物館は日本唯一の鳥の総合博物館として、平成二年に開館しました。水の館とは対象的な鳥かごの、幾何学的形態の窓枠が目につく建物です。

山階鳥類研究所は昭和五十九年に渋谷から我孫子市に移転したわが国唯一の民間鳥類専門研究機関で総裁は秋篠宮文仁殿下、故山階芳麿博士設立の山階鳥類標本館が前身です。標本六万点、図書二万冊といわれています。

⑧ 高野山古墳群

六世紀中頃のもので、古墳時代我孫子地区第2期の前方後円墳を囲む円墳（家族墓）8基、中心に首長のものと見られる1号墳の竪穴式石室があります。1号墳の石室に7体、4号墳の石室には5体と続いて2号、3号、5号墳の順に代々営造された1系列の家族墓です。二代目の4号墳は帆立貝形古墳に変わり後円墳と同じ大きさを保っていますが、代を重ねてその規模は縮小しています。直刀、鉄鏃、鏝、管玉、小玉などの出土品があります。宅地化で現存する3基の古墳の確認は難しく、その面影はありません。（出土品の一部は、現在水道局玄関ロビーに展示されています。）

⑨ 子ノ神古墳群

六世紀前半〜中葉、古墳時代我孫子地区第2期の円墳15、前方後円墳1からなる古墳群で子の神から西600mの斜面台地に分布しています。高野山

古墳群の2倍の規模を持つ複数の古代家族の墓域です。当時家長はある世代で前方後円墳を作るといふ慣しがあったようで、子ノ神大黒天の地にその1基があります。

⑩ 旧村川堅固別荘（景観スケッチ参照）

村川堅固は明治八年熊本生まれ、嘉納は村川堅固が第五高等学校入学時の校長。大学卒業後一時期、嘉納の秘書を務めました。

東京帝国大学教授（西洋史専門）村川堅固は、大正六年我孫子に別荘用の土地を購入し、同十年、我孫子宿本陣の離れを茅葺のまま母屋にするため買取り移築しました。新館の朝鮮風建物は、昭和三年に書斎として建てられました。本来は瓦葺ですが、関東大震災の経験から銅葺にしようと言われています。この部屋の窓からは沼に遊ぶ鳥、漁をする船の長閑な手賀沼が一望出来ました。竹を好まれ、竹林はもとより、外壁の竹細工が目につきます。また、書道家山田海峰氏の揮毫「一望千里湖畔絶景」と、京都大徳寺貫主揮毫の“竹”の掛け軸の所蔵があります。

バーナード・リーチ設計、宮大工佐藤鷹蔵が作った三角椅子二脚、肥後細川家ゆかりの国学者中島広足の書がさり気なく展示されています。堅固の休日はずり三昧であったようで、今の我孫子高校付近に釣堀を持っていたそうです。

一方、昭和初期「手賀沼干拓計画」が持ち上がった時は嘉納や楚人冠等と「手賀沼保勝会」を創り豊かな手賀沼の干拓中止を訴えました。

平成十八年十月以降、市民ガイドが行なわれています（火は休館）。林の中の静寂な別荘です。尚、当別荘周辺は平成十六年に国土交通省関東整備局の「関東の富士百景」に推薦されています。

別荘の庭の下にはチョウチョウ園から下る静かな坂道があります。村川堅固坂と呼んでは如何でしょうか。当時は、この坂下から小船で沼に出て魚釣りの休日を楽しんだそうです。

⑪ チョウチョウ園（菅野みどりさん宅）

第六回景観奨励賞受賞の世界一小さいチョウチョウ園です。個人の趣味が訪れる子供、大人達を虫の世界に引き込み、昆虫も一生懸命生きている事を知ってもらっています。

以下菅野みどりさんへ「景観あびこ」インタビューより抜粋（*4）

『私は埼玉県の見沼で育ちました。見沼は首都圏に残る最大の自然空間と言われています。蝶々は小さい時から大好きでした。蝶々というよりアオムシ、イモムシが好きだったのです。蝶々は飛ぶことが出来ませんが、アオムシはじつとして、他の昆虫の餌になってしまふ。一番弱い。それでなんとなく守つてやろうと言ふ気持ちです。二十八年経ちました。育てた卵は25種類、我孫子には50種類くらいいると聞いています。蝶々の好きな餌は蜜原の花、食草、蝶々の種類によつて違いますが、セツトにして植えて置くと必ず来てくれます。』

⑫ 瀧井孝作飯寓跡

瀧井孝作は大正十一年(1922)に我孫子に来ますが、翌年5月には生涯の師と仰いだ志賀直哉を慕つて京都に行きます。「我孫子の思い出」(*5)の中で当時の我孫子を次のように記述しています。

『我孫子のけしきは、土地の人が「川」と云ふ十丁余の幅のある手賀沼の一夜帯水、四季晴雨共に興味深い眺めに看えた。春の鳩鳥のうぐきや、夏の雨の日

水雞も叩き鷓も歩き、葭原雀の声や、秋の葭間のセキレイの群れや、冬の雁鴨や、沼の上の藻刈舟や、漁の竹笄の所々の棹や。……

*鳩は(におとよみ、カイツブリの古名

我孫子は停車場付近には電灯がついていたが、沼べりの茲は未だ電柱が立たず夜分はランプの灯用いた。夜路は提灯つけて往来した。……』

敷地内は現在市民の手で公園化に向けた整地が三年越しで行われ、平成十九年度に公開の運びとなりました。敷地入口と沼側の丘に子の神古墳群に属する古墳2基があり、敷地の西側の坂道は、古墳坂、と呼ばれています。

⑬ 志賀直哉邸跡（景観スケッチ参照）

弁天山の麓にあり、現在は記念公園になっています。書齋は緑二丁目の宮大工佐藤鷹蔵が作ったもの。彼は大正四年(1915)に弁天山(雁明 1916)に家付きの土地を買い居を構えました。入居に当たって増築しますが、希望する自邸の景観をスケッチし、大工に示して建てています。その作品には手賀沼や我孫子の情景を描いたものが多く、七年滞在していました。

⑭ 白樺文学館

本文学館は、平成十三年一月に佐野 力氏が設立しました。

雑誌「白樺」を中心に発展した白樺派は、大正デモクラシー時代の新しい文芸活動です。当時、白樺派の中心人物の志賀直哉、武者小路実篤、柳宗悦らが我孫子に住み多くの同人や信奉者が来訪。我孫子は矢張り文学者の多い鎌倉に並び称せられる文土村でした。美しい手賀沼の自然環境から創造活動のエネルギーを受けて、彼等は我孫子で多くの優れた作品を創り上げました。また、文

学に止まらず絵画や彫刻などについてもその時代が一番良い芸術を先取りし、ロダンや印象派の絵画などを積極的に紹介したのです。当時の文化をリードした白樺派が、手賀沼のほとりで育まれ、大きく発展した事は、我孫子の素晴らしい文化的財産です。――白樺文学館パンフ*6

⑮ 杉村楚人冠公園

公園は、杉村楚人冠敷地(楚人冠自称白馬城)南端の手賀沼を見下ろす観音山と言う高台にあり、彼の碑が立っています。楚人冠は本名を廣太郎と言う。朝日新聞ロンドン特派員を勤め、また大正四年の世界新聞大会日本代表として渡米、後朝日新聞の最高幹部として永く活躍しました。地元にあつては我孫子ゴルフ倶楽部の創設に力を尽し、手賀沼を「アサヒグラフ」で世間に紹介、別荘地として発展のきっかけを作ったと言われています。

我孫子警察元寿派出所から入る古い道筋にある杉村宅の坂道は、屋敷の木立に覆われ、夏の散歩では一息したくなる涼しげな坂道の風景を見ることが出来ます。楚人冠坂と呼んでは如何でしょう。景観スケッチ参照

⑯ 三樹荘・柳宗悦邸跡（現在個人宅・景観スケッチ参照）と嘉納別荘跡

柳宗悦は、明治二十二年東京生まれ、東京帝大哲学科卒、父樽悦は数学者の海軍少将でした。柳宗悦夫妻は、大正三年柳の長姉直枝子の所有する別荘に転居してきました。路を挟んで東隣に嘉納治五郎の別荘がありました。嘉納は柳の叔父(母の弟)に当ります。柳の別荘は沼を望む天神山と言う高台にあつて、樹齢四百年という椎の木の本が3本屹立して沼を見下ろしています。三本の木は、それぞれ「智・財・寿」の木として村人達から尊ばれていました。嘉納

は其れに因んで三樹荘と命名しています。

またバーナード リーチは、尾形乾山の後、柳宗悦の邸内に窯を造り作陶に没頭しました。柳宗悦の後、田中耕太郎(最高裁判所長官)、河村蜻山(陶芸家)が居住し、現在は村山氏の所有となっています。

現三樹荘主の村山祥峰さんは「景観あびこ」のインタビュー*7で、『昭和十五年、手賀沼の辺りを歩いていてタバコ屋から坂(天神坂)を登ってみた。辺りには一軒の家もない。大変急な坂でYの字に掘れていた。登り着いてみると右側の竹林の中に別荘らしきものがあつた。後で、嘉納治五郎のもと分かつた。その向かいに空家があつて木戸が開いている。何度呼んでも返事が無い。入って見ると素晴らしい風景に圧倒されてたずんだ。』と述べています。

三樹荘の西端には南作古墳があり、古墳が展望の利く、古来の風向明媚な地にあることが判ります。元嘉納治五郎別荘の北側裏手の坂道は、春には梅の花が咲きほころび、長閑なたたずまいをなしています。嘉納治五郎坂と呼んでは如何でしょう。

* 緑・香取神社鎮守の森(景観スケッチ参照)

境内の櫓^{けやき}5、樁^{けやき}1計6本と、隣の緑保育園のスタジイ2本は保全樹木です。櫓とスタジイは、いずれも幹周り大人3人分の腕回し、高さ25^{メートル}もある大樹林で、鎮守の森の貫緑は充分です。

(2) “はけの道” 上方

① 八坂神社

② 白山七つの坂(景観スケッチ参照)

東端の白山坂は昔からの坂道です。下りながら住宅の木立の向こうに見える手賀沼と沼南の森の風景を面白おかしく眺めることが出来ます。冬の木立ちが特に良いです。

西端の坂は、西に向かつて下る木製の階段坂で自転車を持って下ることが出来ます。秋や冬の空の空気の良い午後には富士山が観えます。

その間の宅地路地から下りる五つのコンクリート階段坂はかなり急です。しかし手賀沼の水面から反射する湖水の風景は、時々刻々と風に揺られるように変化し、これも楽しいものです。

③ 中勘助 仮寓跡(公開はされていません)

中勘助は、大正九年家族の不幸から逃れるように白山の高嶋家に来て、手賀沼の自然に心を癒し多くの作品を出しました。「沼のほとり」「堤婆達多」などの作品があります。

「沼のほとり」(*8) の文章からスケッチ風の文章を拾ってみました。

『大正十年一月一日

…… 沼は温かさうにとろりと淀んでゐる。懸けほした唐辛のてらてらした赤い色。私はここに裸木の幹や枝を美しいと思つて眺めてゐる。……

二月二十二日

…… 緑の丘の松、赤黒い杉のあひだに榎かなにかほんのりと赤らんで、鳥の綿毛のやうにふわふわと枝をひろげてゐるのがみえる。沼はてらてらと淀んで鰻かきの舟が幾艘も出てゐる。

四月十九日

…… 日がさつとさしてきた。いつのまにか雲がはれかかつてあたのである。風

上のほうによほど青空がひろがつてきた。雀がちゆくちゆくと轉りはじめた。雨に濡れた杏の花が色はあせながらも照りはえてゐる

かつしかや手賀の大沼に雪ふりて 鳩のなくきけば君ぞ恋しき

八月九日

…… そんなにして永いこと憂鬱なすさまじい日がつづいたのちこの頃の酷烈な暑さがきた。沼は溶銀のやうにとろりと湛へ、森も畑も青白くかすんで、光に白む空を燕が声もなくとんでゐる。……

九月十五日

秋になった。冷たい雨がふる。ところどころに鳴子が立つてなつてゐる。その原始的なしかけと、いかにも秋にふさわしいからからした音がすきである。……

十月二十一日

朝。さらさらと雨がふる。睡気をさます百舌の声。蜜柑や蜂屋柿の美しい濡れいろ。』

④ 白山古墳群

白山古墳は我孫子古墳群の中で最終期に当る七世紀初頭～中葉の12基から成る群集墳です。家父長家族とその兄弟・姉妹の直系親族として、家長の古墳と一緒に入る家族墳の形態です。根戸・船戸遺跡を含めると延長1000年間の台地に19基が分布していました。横穴式石室は二つに分かれています。銅鍔、鉄鍔、ガラス丸玉、水晶切子玉、首飾り、長大の刀多数などが出土します。また、縄文前期の土器片も出土します(付図・1参照)。

⑤⑥ 嘉納治五郎農場(嘉納後楽農園)跡と松本家(景觀スケッチ参照)

嘉納治五郎は、摂津灘で万延元年(1860)生れ、東京帝大卒、在学中に天神真場柔術と起倒流を学び、講道館柔道を編み出した。「柔をもつて剛を制す」を目的に徳育、知育、体育の三要素を取り入れ、精力最善活用を根本原理とした。外遊先の英国イートンスクールをモデルに中高一貫の学校を計画しましたが、昭和十三年国際オリンピック委員会出席の帰途、氷川丸船上でたおれ、全ての計画は挫折しました。

彼は、学園設立するため興陽寺南に二万坪余の農園を取得し、大正八年農業技術を学んだ松本久三郎を迎えて農業経営を行ないました。当時、近隣農家では作らなかつたナス、カボチャなどの野菜と植木養成、果樹栽培も行ないました。農具は馬、4輪荷馬車、馬農耕具などを用いた。その後、種々の理由で農園は分譲されましたが、一部は小規模ながら松本農園として引継がれました。

⑦ 根戸・船戸遺跡と根戸・船戸古墳群；根戸古墳公園(付図・1参照)

縄文早期・中期の遺跡と、七世紀初頭～中葉の古墳が、手賀沼を望める景勝の地、白山中学南側台地一帯に6基が点在します。古墳は、沼側の前方後円墳1基とその周辺の円墳5基からなり、西端の円墳1基は根戸古墳公園になつています。出土品の多い集落跡です。全国的には古墳が少なくなつた七世紀初～八世紀初のもので、我孫子古墳群の中で最も新しいものです。

⑧ 船戸の森(景觀スケッチ参照)

⑨ 元根戸新田名主邸跡(景觀スケッチ参照)

元根戸新田名主邸は、旧跡羽倉外記代官預所跡で、水害管理に関わる訴訟を解決した名主八十郎が建てたと伝えられていましたが、近年取り崩された。

⑩ 神戸邸の白壁塀（景観スケッチ参照）

神戸邸は、白壁塀と大樹林、湧水を対象に、第三回景観賞に選ばれました。

⑫ 根戸城址（付図・1参照）

大井川から根戸に上陸する船戸の船着場に近く、布施の渡し場「七里の渡し」に通じる交通の要所を抑える位置にあります。築城様式は戦国期のもので、城主は根戸三郎胤光(230)と言われますが詳細は不明です。在地小領主が築城したものと考えられます。その後文明年間(258)頃大田道灌が千葉孝胤を酒井根で破った後改築して城砦の形にしたという伝説があります。手賀沼を挟んだ対岸に戸張の城址、北西には松ヶ崎城址があります。根戸の地名は鎌倉時代まで遡れるものではありませんが、古代東海道の茜根津駅あかねづと見る考え方があります。現在この根戸城主である日暮朝納さんは『本当の城主は判らないが、旧日暮家の小野家から分家して七代目と述べています。』*9

⑬ 金塚古墳（平成八年 我孫子市指定文化財（有形 付図・1参照）

我孫子市古墳時代初期、五世紀後半の円墳です。埴輪の他多数の出土品があります。根戸城郭の西側40mに位置する直径20m、高さ2mの丘です。千葉県で十例の一つという短甲の他、銚、銅鏡、須恵器、しっかりとした埴輪、滑石製のすばらしい石枕など近畿直送と思われる副葬品を見ると水神山首長から二、三代目の大和政権と直結した首長として、交通の要衝を抑える武将であったのではと考えられます。

石枕は遺体の頭部に当てられる物で、霞ヶ浦から利根川下流域に分布する

「常総型」石枕で近年柏市の弁天古墳からも出土しました。この二つの古墳の支配者は、香取海の各水系の支配者と舟で密接なつながりを持っていたものと考えられます。

⑭ 馬頭観世音

六観世音の一つ。六道の内畜生界に苦しむ衆生を救う仏といわれます。しかし、頭上に馬頭を載せている事から馬の守護仏と考えられるようになりました。馬頭観音塔が建てられるようになったのは江戸時代になってからです。

旅人は、馬頭観世音を我孫子宿に入る手前の目印としていたそうです。

(3) その他の名所

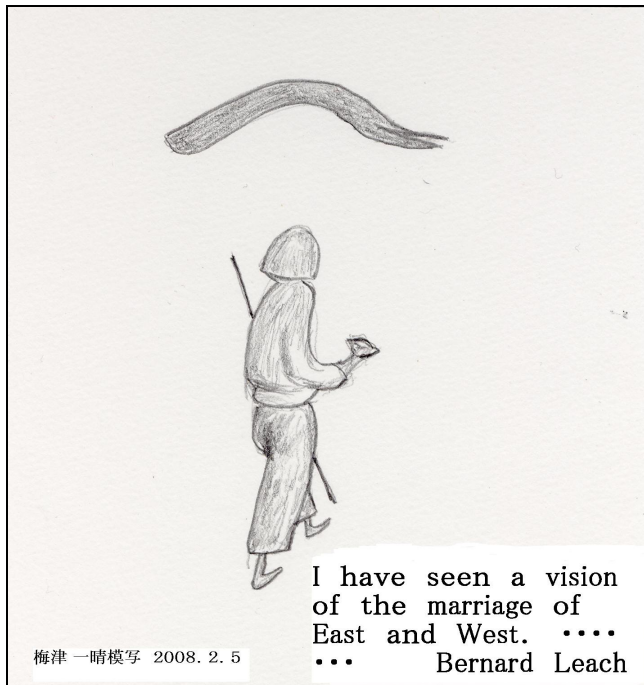
* 法花坊(法華坊)遺跡(付図・1参照)

縄文前期の包含地です。法花坊は、相馬惣領家・相馬御厨の中心で巨大な館跡と土塁を残す集落跡でもあります。しかし相馬惣領家は、南北朝の騒乱で南朝方について滅亡したため資料が消滅し、またその後の戦国時代に千葉氏の一族の原氏とか円城寺氏が台頭し、この辺を押さえたため相馬氏の本拠が判らなくなっていると考えられています。構造は簡素で防御性は高くありません。周辺に「中馬場」といった字地名があります。現在、台田四丁目の跡地は公園となつています。地元の人は法華坊と言っています。

* 北星神社

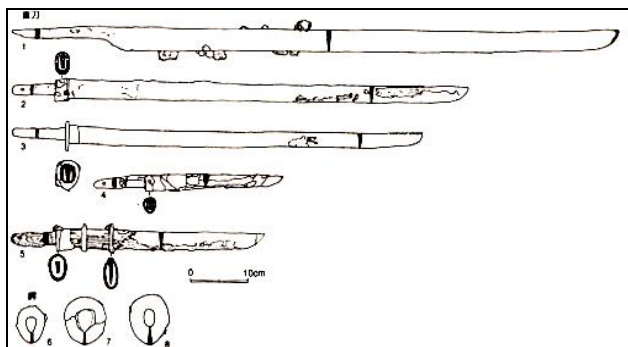
6号線沿い我孫子市の西端に位置します。相馬氏の所領時代に立てられたとされ、妙見宮と呼ばれた時期があり、相馬・千葉氏と関わりある宮です。

付図・1

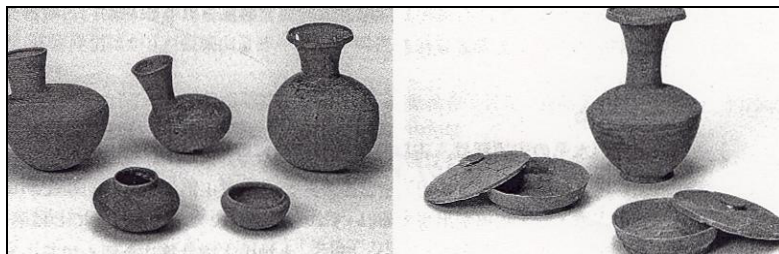


山と人 巡礼 バーナード リーチ(1953) *1

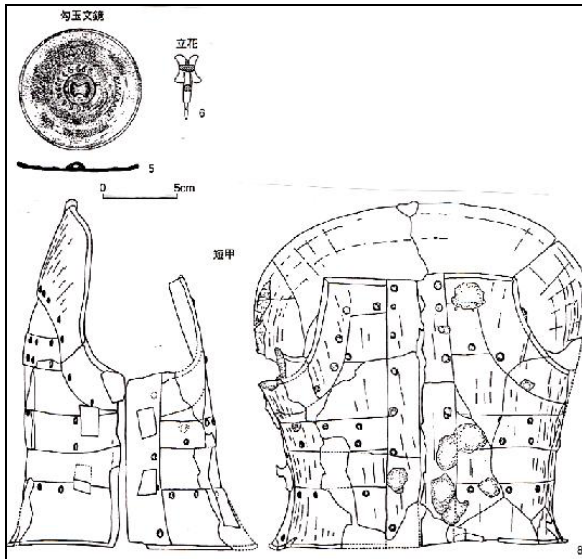
手賀沼公園リーチ石碑 梅津 一晴模写



白山1号墳から出土の直刀と鉾 *10 原図出典 千葉県歴史



根戸船戸古墳群出土の須恵器 ; *10 写真撮影 三浦輝与史



金山古墳から出土の 勾玉文鏡石枕に飾る立花と留め式短甲；

原図出典 千葉県歴史 *10



法花坊遺跡(現台田四丁目公園) *11



根戸城址と金塚古墳位置図 *11